

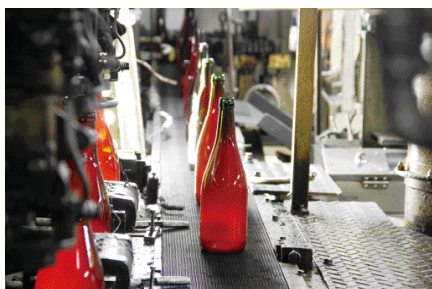
## 多品種少量のものづくりを強みに、 オンリーワンのガラスびんの製造事業を展開



### 独自の生産技術を活かして、多彩な色とデザインを実現

西宮市の鳴尾浜の一角に本社を置く株式会社山村製壺所は、ガラスびん製造を手がける日本山村硝子株式会社の100%子会社である。親会社である日本山村硝子は、1897（明治30）年に山村商店として六甲山麓の砦砂（けいしゃ）の採掘販売を始めた後、1914（大正3年）になって西宮市内において山村製壺所として創業した歴史を持つ。今日では、日本山村硝子として事業をグローバルに展開する存在にまで成長している。こうした歴史を振り返ると、西宮市とガラスびんは古くから深い関係にあるといえる。

現在の山村製壺所は、日本山村硝子を基幹企業とする山村グループのもと、1983（昭和58）年に設立され



た。山村製壺所の現社長、浅野公平氏によると、「当時は大量生産、大量消費の時代の中で、ガラス

びんの新たな可能性を追求するという観点から設立されました。その後、当社のコーポレートメッセージである『Amazing & Emotion』に基づき、日本山村硝子の原点である山村製壺所という社名を継承してきました。多品種・少量生産を強みとして、顧客が求める仕様に応えるデザイン表現と技術を駆使して、品質を追求したガラスびんの製造を行っています」と語っている。

同社がめざしてきたのは、ガラスびん業界におけるオンリーワンの価値だ。独自の生産技術や金型技術を活かして、多彩な色・大きさのバリエーション、デザインにこだわった個性的なびんなど、酒類から化粧品まで幅広く対応することができる。シンプルな形からオリジナリティのある複雑な形まで、一つの金型で多彩な色の生産が可能だ。多色かつ自由なデザイン形状のびんを小ロットで製品化できるのは、国内で同社だけといっても過言ではない。

### ガス酸素混合燃焼の窯を導入して、 CO<sub>2</sub>の排出削減に努める

現在、同社では30色ものカラーびんを製造することができ、年間500品種の製品を生み出している。製品に対する評価は高く、日本ガラスびん協会が主催する「ガ

ラスびんアワード」では、これまでに最優秀賞をはじめとして、多数の受賞歴がある。浅野社長は「お客様第一主義のもと、当社だからできる技術を駆使して、環境に配慮しながら、驚きと感動のボトルを提案することに努めている」と、自社の強みについて述べている。

同社はニッチトップのものづくりを追求する一方、早くから環境への取り組みを進めてきた。「ガラスは4000年以上のサステナブルな歴史があり、珪砂をはじめとする原料にしても、地球上の資源を活用したものです。いわば地球からの贈り物をいかに活用し、リサイクルを通じて地球にやさしいものづくりを考えていくことが当社の使命と心得ています」と、浅野社長は環境への取り組みについて述べている。

同社における大きな課題は、製造時におけるCO<sub>2</sub>の排出削減だ。原料を溶かす溶解炉を運用するためには、大量の熱エネルギーを必要



酸素燃焼炉

とする。これに対して、同社では日本で唯一ガス酸素混合燃焼の窯を導入し、酸素燃料を用いることで、普通の空気燃料に比べて溶解炉外への排出熱量を大幅に低減するとともに、燃料の消費量とCO<sub>2</sub>の排出量を大幅に削減している。

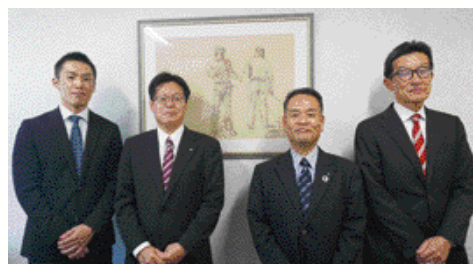
浅野社長によると、「ガラスびんはリサイクルの際に素材の品質劣化が少ない点から、水平リサイクル（びん to びん）として何度でも新しいびんを作ることができる長所がある」ことから、同社では再生原料（空きびんなどのガラス製品を細かく砕いたもの）を活用したガラスびん製造にも力を注いでいる。現在、原料の約60%は再生原料を用いているという。再生原料の活用により、珪砂・ソーダ灰などガラスびんの主原料となる貴重な天然資源を節約できるとともに、原料をガラス溶解炉で熔融する時間が短縮でき、燃料の使用量を削減できる。

## 水平リサイクルに関して西宮固有のビジネスモデルをめざす

水平リサイクルの長所からガラスびんは「環境の優等生」とされているものの、日本においては容器としての需要が高まっているとは言い難い。「国内においては、平成2年をピークにガラスびんの需要は半減している状況です。一方で世界を見渡すと、欧州では化粧品やワインの容器はガラスが中心であることから、需要は伸びています。国内でもガラスびんの価値を見直す取り組みが欠かせないと考えます」という点を浅野社長は強調する。

浅野社長が構想しているのは、西宮市を起点としたガラスびんの水平リサイクルの仕組みづくりだ。冒頭で述べた通り、西宮市は山村グループがガラスびん製造をスタートさせた地であるとともに、市内においてガラスびんの水平リサイクルを展開できる態勢が整っている。その利点を活かして、西宮市独自のシステムを立ち上げたいと願っている。「市内には、金型工場をはじめ、びん工場、再生原料工場がそろっています。ここにガラスびんを使用いただいているメーカー、販売店、そして消費者、行政などが連携することで、サステナブルな水平リサイクルの仕組みを構築できると確信しています。これによって、時代をリードする西宮市としての強み、魅力をアピールしたいのです」と、浅野社長は抱負を語っている。

同社では、2003年度から行政やNPO 法人と協働で小学校に出向き、「ガラスびんの一生」をテーマにした出前授業を実施するなど、環境学習活動を通じて「ガラスびんリサイクル」の意識を広める取り組みを続けている。ガラスびんの水平リサイクルのシステム化に向けて、時代が着実に動いている。



### ■会社概要



- 社名：株式会社山村製壺所
- 代表取締役社長：浅野公平
- 設立：1983年（昭和58年）
- 本社所在地：西宮市鳴尾浜2-1-18
- 電話：0798-43-1301
- 事業内容：ガラスびんの企画・製造・販売および、それに関する事業
- ホームページ：<https://www.yamamura.co.jp/yamabin/>